

# ひまわりからの メッセージ

71号

2017. 3. 13

NPO ひまわりの花内  
西濃圏域  
発達障がい支援センター

発行人：中野にみ子

## ある少女との出会い

～原点に立ちかえって～



年を重ねてくると、自分の人生を振り返ることが多くなります。私になぜ障がいをもつ子どもたちと関わりようと思おうようになったのかというと、遠い昔に一人の少女との出会いがあったことに思い到ります。私の両親は東京から疎開してこの地に住みついたので、私たちは、いわゆる余所者でした。私は疎外感をもっていましたし、おまけに病弱でもありましたので、小学校の校庭に一人ぽふんと居る少女の姿が自分と重なって見えたのかもありません。

知的な発達が遅く、たまたその少女を家に招いたこともあり、いつの頃からか私は福祉の道を志すようになりました。

しかし、父は、私の選択を良しとほしませんでした。「自分の優越感ではないのか?」「偽善者ではないのか?」「障がいをも

った人と、人としてどの様に向き合っていくのか?」「お前自身の生き方もどう考えるのか?」今、思い返してみても、哲学的な命題を与えられたような、父との会話であったと思います。そして、父が最後に出した結論は「四年間の猶予」でした。「大学四年を経てなお福祉の道を志すのであれば、その時は黙って送り出そう……。」というものでした。

私の大学在学中に、かの少女は天に召されてしまいました。少女との出会いがなければ、おそらく今の私はいなかったことでは。春、庭先のクリママスローズが白や赤紫の花をつけはじめました。庭の木の草の息吹を感じると、また力をもらいます。「私たちも応援しているよ」と背中を押されているように思います。そして原点に戻ろうと思おうのです。

けれど、障がいに関する本さえ無かった時代と、情報があふれかけている現在と、人の心はどう変化したのでしょうか。誰もが気軽に福祉に介入できるようになった反面、営利事業として起業する人々も増えて、子どもたちも大人も利便性に流されていくような危うさを感じます。そして行政は、障がいをもつ子どもたちの未来を真剣に考えた施策を進めていくってくれるのでしょうか。

私は心の中に疑念や、哀しみ、怒りなどを持ちつづけながら、来年度に向けて、また一歩、歩み出そうと思えます。庭先では、うぐいすが啼きはじめました。

## 自閉スペクトラム症における

### 思春期症例の問題行動



日本には様々な学会があって、論文がたくさん出されています。私もいくつかの学会に入っていて、論文集を手にするのですが、なかなか読むことができません。

その中で、日本児童青年精神医学会の論文の中に見出しのタイトルのシンポジウム報告を見つけました。

子どもたちの自殺の問題は心痛むことが多く、特にいじめによる自殺には、言いようのない腹立たしさを覚えます。今回は、思春期の自閉症の子どもたちについて考察されていました。

### 発達障害の自殺研究

思春期において自殺をしたり、自殺未遂の人の研究は、アメリカやイギリス、北欧などで一九八〇年代から進められてきたのですが、ASD（自閉スペクトラム症）の思春期の自殺については、なかなか疫学研究の対象になりませんでした。

東海大学の三上克央さんを中心とするグループが二〇〇六年に発表した自殺企画例が世界で最初のASDの自殺企画例とされたということでした。

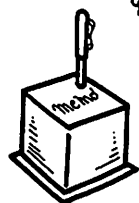
また思春期ASDの人と、定型発達者（論文記述）と比較すると、ASDの人が自殺関連行動を起こす頻度が二十八倍高いと報告され、性別としては男性の方が高いということでした。

しかも自殺しようとする場合、ASDの人は、既遂に到ることが多い結果になったそうです。（亡くなってしまふということです）

### 併存症

思春期ASDの併存症として抑うつと不安は知られていますが、この論文には、うつ病と適応障害も思春期ASDの自殺企画の促進になるという報告があると示唆しています。

### 診断



この論文では、ASDの場合、言語的コミュニケーション能力がかなり高いために、通常の学級で学び、その後進学して就職するケースも多いため、対人関係や社会生活上の深刻な問題が生じるまで医療に受診することが少ないことも報告されています。自閉症の人と異なる点でしょう。

ASDの自殺企画例では、より高度なスキルが要求される思春期以降の対人関係や社会生活上の破綻が契機として存在し、そこに彼ら（彼女ら）の独特の限定的な思考形式や固執性が加わって問題に発展していくと考えているのです。

## 心理的社会的要因

又、他の研究者は、自殺関連行動の危険因子の一つとして、いじめの経験を指摘しています。症例でもASDの自殺企画例の四分の三に、いじめの経験を認めたということなのです。

三上さんらは、就学後のいじめや対人関係構築の失敗による自己評価や自尊心の低下が存在し、しかも幼少期からの家庭内における葛藤が社会的孤立感を形成していくと考えられるといっています。

家庭内葛藤の多くは、本人の独特の論理や固定観念に対する固執と、養育者のASD概念に対する不十分な理解が介在し、相互に影響を及ぼしているとしています。いじめによる自尊心の低下も、家庭内葛藤故に相談できない状況にあって一層社会的孤立感が増大していくことが心理的社会的因子の一つであると結論づけているのです。

私のまとめ方が悪いので、「どうということ？」と読解に困られていらっしゃる方も多いでしょう。私は、難解な文章を読みながら、知的な遅れを伴わない自閉スペクトラム症の子どもの理解と、いふことも考えてみました。幼児期にスマイルブックを持ち、園から小学校へ支援のひきつぎをしても、先生方から「この子はスマイルブックは必要ありません」とか、「家族の方も、もう心配されてい

ないので……。」と言われるケースも実は少なくありません。

学校生活をよりよく上で教師に迷惑をかけることもないし、勉強もできるし、ちょっと変わったところはあるけれど大丈夫じゃないのかなあと、考えてしまうのです。義務教育の間は、それでもやっていたのでしょうか。高校、大学、就労……と、社会的スキルが要求されることかふえてくると、とたんに困ることが起きてくるということだと考えます。

たとえば学校で、「お母さんの心配しすぎでしょう。」と言われるも、いいえ、そうではありません。」と心の中で反論できればいいでしょうが、大部分のお母さんは、そこで「良かった……。」と安堵されるのが普通でしょう。ASDに対する家族の理解というものは、実は口で言う程簡単なことではないでしょう。

しかも、百歩ゆずって「いじめ」等があったとしても、勉強ができる、学習で困っていることが少ないということは、もう、それだけでお母さん方の安心感につながっているはずで、幼い頃に言われたことなど、もうすっかり忘れ去られているでしょう。

実は、もう一つ都立小児総合医療センターの資料がありましたので付記しておきます。ここでは世界保健機構の診断基準が使われているのでPRD（広汎性発達障害）とそれ以外の非PRD群とに分けて自殺関連行動の誘因を探っています。それが次ページの表になります。

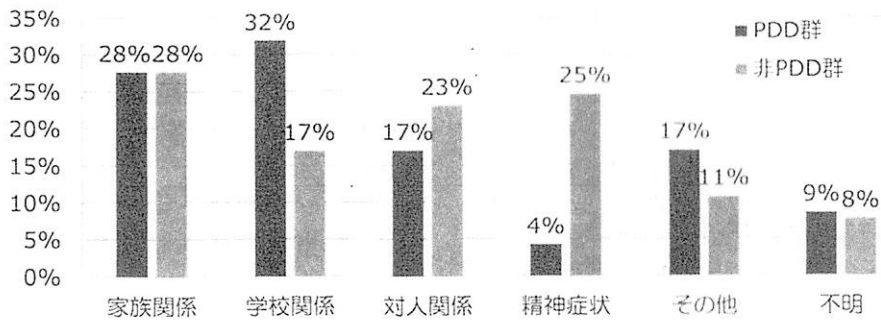


図1 自殺関連行動の直接的誘因

これらの症例報告から見えてきたのは、一つには家庭の問題です。保護者の方に子どもも理解をしようには、子どもと関わる保育者や教師の正しい理解がまず必要です。子どもたちの不安、抑うつ感情、自己肯定感などは、集団生活の中

PDD群では、学校関係が一番多く学習、試験、進学に関する問題、不登校など学校不適応が問題となっています。家族関係は、どちらの群も親や同胞との関係不良、葛藤となつていきます。しかし、PDD群は非PDD群に比べて親との同居が多く、被虐待歴は少なかったということでした。

また、PDD群の方がIQは高かったにもかかわらず問題解決能力が低い可能性があること、自殺を企めた場合、男性では一回きりの行動で完遂することが多いこと、そのために自殺の行動が突然に見えるという点も報告されていました。

で考えていくべき問題を多く含んでいます。「どうせ僕なんか...」「どうせできないから...」「何をしたらって仕方ない...」といったことは、何度聞いたことでしょうか。「僕はきつと変に思われている。」と言った青年にも会いましたし、自分の頭を叩きながら「僕なんか生きていたって意味ない。」と泣く子もいました。

私たちに何ができるのでしょうか？自分は生きていて良いんだと思つてほしい。だめな人間だなんて思つてほしくない。だから彼の、彼女の不安をやわらげてあげたいと思うのです。でも、無カたなあといつも思います。皆さんもきつと同じでしょう。

自信がもてるもの、好きなものが見つけられるといいなあと思います。聞いてくれる人がいることも支えになると思います。日々の言動に家族は苛立つかもしれないけれど、二次的な問題にまで発展してしまわないように、一緒に考えていけたらいいなと常々思っている私です。

自殺したいという願望をもち、突然に命を絶つてしまうことのない様に、周りの大人が見守つていきたいものです。

お知らせ

場所は 奥の細道記念館



センター親の会の日程は、次の通りです。七月のみ火曜日です。

- 4/17
- 5/8
- 6/5 (水)
- 7/4 (木)
- 9/11
- 10/6 (水)
- 11/13
- 12/11
- 1/15 (水)
- 2/19 (水)
- 3/12